

1°Cの気づき

上空約10kmで吐き出される

渦の中を回転しながら上昇した風は、やがて下降気流になる。

目の中では上から下への流れ

目の中心は、渦に取り囲まれている。気圧が低くても周囲から風が入ってこれないので、上空から空気が降りてくる。

入道雲の巨大な渦巻き

台風は、熱帯の海で生まれた、発達した低気圧。入道雲の巨大な集まりで、その下は大雨となる。中心は暖かい空気がたまっている。

中心めかけて風が吹き込む

低気圧の中心に向かって、周囲の空気が次々と海面を通過して吹き込む。その風は、台風目の周りにある壁雲の付近で上昇する。



動画で見る台風のメカニズム

科学技術の動画専門サイト「サイエンスチャンネル」(P.38参照)の番組「空を見上げよう～気象にまつわる科学と技術～」で、気象現象のメカニズムを分かりやすく説明。台風も取り上げており、子どもでも理解しやすい内容となっている。

<http://sc-smn.jst.go.jp/B070513/>

台風と付き合う

日本付近は、台風の通り道になりやすいので、災害への備えが必要だ。気象予報士の田代大輔さんは、台風が近づいたら天気図や衛星画像に注意を払ってほしいと呼びかける。詳しい見方が分からなくても、いろいろな情報を得られるという。

「例えば、雲の画像を見て、目がクリツとしている台風だったら要注意です。目の所はかなり強い下降気流があり、その周りには激しい上昇気流もあります。台風の渦の回転が強いということですよ」

また、台風の進路を予報する図について、誤解している人が少なくないと田代さん。「進路を示す予報円は、

決して台風の大きさではなく、台風目の中心が通るだろうと予測される範囲。どこに行くか分かりにくい台風は、予報円が大きくなります」

災害を起こす台風。しかし、田代さんは、恵みをもたらす面を見失ってはいけないと言う。

「例えば、台風はたくさん水を運んでくれます。枯渇しかけていたダムが1回の台風で満杯になったこともあります。日本にとって、台風は大切な水資源なんです。気候を変える力も持っていて、台風が過ぎると、秋が深まることもあります」

日本人は台風とともに生きてきた。台風の進路は変えられないが、天気図や衛星の画像などを使えば、上手に付き合えるかもしれない。

「台風を含めて天気のことをよく知ることです。相手を知ることが備えや防災につながります。知識だけではなく、日ごろから雲を見たり、風を感じたりと、五感を使って感じて欲しいですね。気象という身近な自然がどう変化するか、肌で分かってくる」と田代さんは助言する。

筆保弘徳(ふでやす・ひろのり)

博士(理学)。気象予報士。横浜国立大学教育人間科学部准教授。謎の多い台風の発生メカニズムを研究。気象現象を分かりやすく解説した著書も多い。

田代大輔(たしろ・だいすけ)

気象予報士。気象キャスターネットワーク事務局次長。NHKの報道番組などで気象情報を担当してきた。現在は週2回、とちぎテレビで天気予報を担当。著書:『お天気歳時記』(NHK出版)。